

2021 年度博士論文（要旨）

西洋国際関係と東洋天下体系

桜美林大学大学院

張 強

目次.....	i
序 章 天下大乱.....	1
第 1 節 問題設定.....	1
第 2 節 問題背景.....	4
第 3 節 先行研究.....	8
第 4 節 分析枠組.....	12
第 5 節 研究意義.....	13
第 1 章 国際関係.....	15
第 1 節 政治現状.....	15
第 1 項 絶対権力.....	16
第 2 項 自然状態.....	17
第 3 項 人権譲渡.....	19
第 2 節 帝国主義.....	20
第 1 項 社会契約.....	20
第 2 項 自由民主.....	22
第 3 節 国際関係.....	22
第 1 項 政治行政.....	23
第 2 項 官僚主義.....	24
第 3 項 利益代理.....	25
第 2 章 天下由来.....	27
第 1 節 世界観がない世界.....	27
第 2 節 天下の本・原・用.....	33
第 1 項 天下の本.....	33
第 2 項 天下の原.....	34
第 3 項 天下の用.....	36
第 3 章 天下踏破.....	38
第 1 節 天命.....	38
第 2 節 民心.....	41
第 3 節 徳治.....	44
第 4 節 理法.....	53
第 5 節 選賢.....	55
第 6 節 協和.....	57

第4章 天下治乱.....	60
第1節 怨天から治乱.....	60
第2節 治乱弁証法	63
第3節 兵家弁証法	65
第4節 道家弁証法	68
第5節 自然弁証法	69
第6節 唯物弁証法	71
第5章 天下形勢.....	75
第1節 近代における形勢	76
第1項 リヴァイアサン(ホッブズ)	76
第2項 世界共和国(カント)	78
第2節 現代における形勢	79
第1項 万民の法(ロールズ)	79
第2項 文明の衝突(ハンチントン)	80
第3項 世界対話(ハーバーマス)	81
第3節 将来における形勢	83
第1項 帝国(ハートとネグリ)	83
第2項 逐鹿中原	87
終章 「民」本体論.....	90
第1節 三位一体.....	90
第2節 人類学本体論.....	92
第1項 感性実践と認知能力.....	92
第2項 「人」と「民」	94
第3項 民主主義と「民」本政治.....	96
第3節 結論	98
付録 天下中庸図式.....	99
引用文献	100
参考文献	108

西洋国際関係と東洋天下体系（要旨）

1. 本論の目的、主題および結論

本論の目的は「天下」の概念を分析道具として、趙汀陽が提起した「天下体系」の概念を批判的に考察し、その修正、補足を行うことにある。

趙汀陽が中国政治学を主張した前に、冒頭でも、「天下」、「治乱」、「形勢」を前提として置いた。しかし、趙は、「天下」、「治乱」、「形勢」の三者がいかに関連するか、そして「治乱」、「形勢」とは何かを明らかにすることなく、ただ「天下」のみ論究したにすぎない。

本論は、中国政治学の「天下」、「治乱」、「形勢」の概念が三位一体であり、分離できないことを主張する。それを論証するために具体的な事例を中国古典と歴史の中に追究する。さもなければ趙の「天下」概念が唯一の世界観とみなされる虞がある。たしかに趙の学術的努力によって、「天下」という世界観は中国でも世界でも広く影響をもたらす結果になった。本来、天下、治乱、形勢は三位一体となった概念であるが、趙のようにほぼ「天下」概念だけを論ずれば、「天下体系」の概念全体の理解が難しくなり、批判を受けやすい。その最も典型的な批判は、「天下」の概念が理論上受け入れられても、それは単なるひとつの世界観でしかなく、現実の政治に影響をもたらすことはできない、ということにある。そうであれば、「民主」、「自由」、「人権」より実践を重視する「天下」、「治乱」、「形勢」が「民」にとってより望ましいという主張が難しくなる。結果、「天下」の概念が東洋型中国政治学の基礎をしなないと、中国政治学の将来について語るができなくなる。

本論の結論は、あくまでも「主権／国家」より「天下」であり、「民主／自由」より「治乱」であり、「博愛／人権」より「形勢」が「民」にとって望ましい、ということにある。なぜならば、「主権／国家」は国境により国家の範囲を限定し、「民」を分割するからである。また「民主／自由」は、唯物主義の観点から見れば、その本質が「イデオロギー」の一形態でしかない。さらに「博愛／人権」は、地域の歴史や文化、国家の貧富の格差等の現状を無視しては、たんに意味のないプロパガンダとなる。

隆盛を誇った西洋政治学「主権／国家」、「民主／自由」、「博愛／人権」より「天下」、「治乱」、「形勢」こそ、東洋型中国政治学の現実な基礎である。

2. 問題の所在

「BORDER」で区切られる世界は、天下体系の世界ではない主権国家世界である。問題がここに発生する。

西洋の政治理論は主権国家を基本概念とする理論である。主権国家を分析単位と捉え、政治現象を分析し、政治制度を考察し、行為主体間の因果関係を究明することを目的としている。西洋国際体系とは西洋政治理論にもとづいて構築された国際体系であることを理解することが重要である。

この国際体系の中で、世界は国家の獲物であり、搾取対象でしかない。最も極端な例は「帝国主義」である。産業革命以来、「自由」、「民主」、「人権」のスローガンを掲げ世界中を侵略し他国や他民族と闘い、領土や資源を奪ってきた。しかし、「自由」は国境を越えることなく、「民主」は白人の政治的真理でしかなく、「人権」は資本家の特権でしかない。本論は、「自由」、「民主」、「人権」に代わる、「天下」、「治乱」、「形勢」という三位一体としての東洋型中国政治学について論究する。

カール・ヤスパースの言う「枢軸の時代」にさかのぼれば、中国には、元々「正心、誠意、格物、致知」さらに「修身」、「齋家」、「治国」、「平天下」が「不亦楽乎」など、「自由」、「民主」、「人権」に代わり、さまざまな哲学・思想がある。空理空論を避けて、これらを実践することが必要であろう。

現代儒家にはいくつかの流派がある。この中で、本論が天下理論をとり上げるのは、何よりもその世界観と方法論、そして最後に本体論である。正しい世界観の把握こそが、実践の基本である。

西洋政治学の欠陥は、自己中心的で狭量な範囲でしかその政治原理を適用できないことにある。その政治学を世界に無理強いすることがあってよいのだろうか。西洋政治学における全体性の欠落は、ある意味当然であり、そのため包括性と解釈性を欠いている。

こうした西洋の主権国家観や近代西洋国際体系に代えて、中国の天下概念に基づく天下体系の概念を提起する。

3. 分析枠組

序章で、西洋政治学における「辺境」—「主権」—「国家」の由来、さらにその中で生まれたイデオロギー、「自由」、「民主」、「人権」の由来とその限定性と混乱性を批判し、中国政治学の原点、世界観としての「天下」を導出する。

第1章で、西洋型の国際政治が「主権国家のクラブ」という形で存在し、その主権がギリシャ「城中」の「支配権」で、その「支配権」の「絶対性」をキリスト教から考察し、それが人間の「自然状態」を解決した一方で、他国への侵略と搾取を行うことが避けられない、ことを考察する

第2章で、天下由来について、墨子が採用した「本」、「原」、「用」の三段式論述法で考察する。主たる研究文献として趙汀陽の『天下体系—世界制度哲学導論』を取り上げ、その他の「天下」思想に関連する文献と比較考察して、趙汀陽の主観性を退け、客観的な「天下」思想を剔抉することに注力する。

第3章で、天下体系の包摂性概念を紹介し、趙汀陽の天下体系の三層説、すなわち「地理の天下」、「社会の天下」、「政治の天下」が「天命」、「民心」、「徳治」、「理法」、「選賢」、「協和」という六つの部分に変更し、部分に分けることで、有機的な内縁関係を変えることなく、後学の者徒の研究の用になる研究を目指す。その中で、「天人合一」を前提として、趙汀陽の中心論題「配天」に代えて、趙汀陽の「天下体系」の中に存在した内容を六

つに区分した上に、内容を補強し、「天下体系」の概念を一新し、現代の科学にも応用可能な、独創的な天下モデルを創案する（図1と図2）。

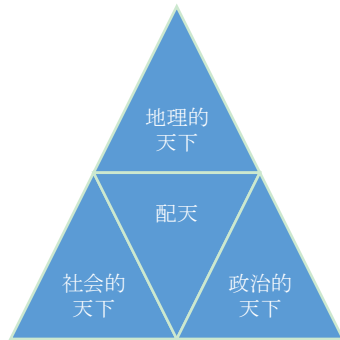


図1 筆者作成：趙汀陽の「天下体系」三層説



図2 筆者作成：三層説から改造された六部説

第4章で、近代政治学の方法論の中で、洋の東西を問わず、これまでは二元弁証法が最も一般的であったが、その方法論を分析する。他方、東洋弁証法すなわち道家（老子）、兵家（孫子）、儒家（治乱）という方法論および西洋弁証法の唯心主義弁証法（ヘーゲル）、自然弁証法（エンゲル）、唯物主義弁証法（マルクス）の方法論とを、その由来や特徴について比較考察する。

第5章で、西洋政治学及び西洋哲学にまだ存在しないパラダイムを導入し、中国語の哲学用語でいえば「中観」で部分と全体を結びつけ、政治学に世界観（我々がどのような政治世界に生きるかという政治学の原点）と方法論（どのような方法で現存する世界を改造するかという行政学の原点）を結びつける哲学の新たな視点について論究する。このような観点は「世界政治解決案」を巡り、その理論とそれに応じた実践および可能性を比較考察し、最後に、「逐鹿中原」について考察する。

終章で、「正、反、合」の「合」に相当する、すなわち西洋政治学の「人」と「人」の平等関係より、東洋の「王」、「民」の上下関係こそ、政治学であるとの結論を導く。この思想、民こそ本体論としての政治思想と言っても良いだろう。

4. 論旨の展開

序章で、「天下大乱」に基づき本論の主張を展開することを明記する。

確かに、国内政治から見ると、上手く治理される国家とそうではない国家が両分し、「何家歡喜何家愁」であろうか。しかし、国際政治を見ると、任意の国家が独善的に統治でき

ず、世界が分裂しているという状況が事実であり、「一統天下」の秋水は目のたとえを使える状況で、「天下」、「治乱」、「形勢」という三位一体の中国政治学を主張した。

第1章で、現在の主権国家の国際関係について議論する。

主権形成の典型的な説を概観する。すなわちキリスト神権の絶対支配、ジャン・ボダンの君権神授、ホッブズの個人安全権力譲渡、ルソーの人間一般意思で社会的契約達成という四説を説明し、さらに、このような主権による内外政策を弁別し、対内に民主自由というイデオロギー宣伝と対外に帝国主義の侵略政策が主権型国際関係の二つの直接的な結果であることを概説する。

第2章で「天下」の概念について論ずる。

趙汀陽によれば、天下の根本的な性質は「無外」(all-inclusiveness)である。即ち、世界には内部があるだけで外部がない。この思想は『春秋公羊伝・隠公』の中の「王者無外」に由来する。天下の無外性が「蛮夷」に対しても、「化」が可能であり、舜、周王は東夷人ではあるが、王にもなりうる。「王者無外」は西洋的な宗教戦争よりは、ましな思想である。具体的にいえば、天命は自然性、道徳性、政治性を持ち、民心に基づく。民心を投票によって確かめる必要がない、天命は、曖昧でもなく、民心に触れた時点で同情が生まれる。現在の民主主義政治が多数派による暴政を行っており、道徳的ではない。長期にわたる安定した政治を期待すれば、徳治以外に方法はない。この観点は、ロールズの「正義論」にも適う。徳治は難しいものではなく、公正な配分が可能である。貧富の格差が拡大した現代において、天下無外の概念は大いに役立つであろう。この配分の方法を維持するには、選賢与能が最も重要である。

選賢与能について、功利主義者、政治経済学、リアリズム論など西洋政治学の中心主題であるモーゲンソーの「インタレスト」論で立証できる。「インタレスト」の権力政治においては世界大戦になるか、抑止力が機能しても冷戦になる。冷戦が終わっても、結果的には帝国主義へと変容する。

主権在民は、人民の正しさを前提とする。その結果、西洋政治学では封建君主専制と個人権力抑制に反対し、公的な権力を監視する「民主」と私的権力を保障する「自由」の両テーマが現れた。「民主」と「自由」が人々を封建主義の圧政から解放し、国家、政府、個人の間を新たに構築し直した。近代国家はこの基礎を踏まえた上に、主権国家の政治制度を構築し、主権国家概念は近代化を支える政治学理論として流布し、その正当性が確立された。この西洋に固有な「特殊」な環境から生まれた政治哲学の本質とは、小規模な政治社会の安定性を維持する思想と制度についての概念でしかない。

第3章では、周の天下体系の「王者無外」の天下および趙汀陽の天下体系の三層説すなわち「地理の天下」、「社会の天下」、「政治の天下」を「無外」、「天命」、「民心」、「徳治」、「選賢」、「協和」という六つ区分し、考察した。

また、政治秩序にとって政治のアクターの合法性は最も重要である。天下体系は多様なアクターを認めているが、アクターの合法性に対する要求は厳格である。このような合法

性に対する要求こそ、天下体系において「天命」と呼ばれるものである。アクターが天命を失った場合には、革命になる恐れがある。天命を失ったアクターが暴力で統治を維持しようとするれば、協調性に欠けた社会が現れ、統治が長期的に継続できない。天命は政治の正当性を意味しており、徳行は天命を意味している。また徳行が社会实践の範囲に属している場合には、天命を得られるかどうかは社会实践から判断できる。周人は「民心」が判断する証拠として認識している。徳治の中核の概念を公正と考えている。

公正は平等と異なる。周のような中国の封建社会において、土地が最も重要な生産資料である。土地に対する配分から公正という原則を見出すことができる。徳治は公正な権力の配分に基づいている。そしてその具体的な政治とは賢人政治である。「建官惟賢明、位事惟能」（尚書・武成）の原則に基づき、「野無遺賢」の結果に達する。このような権力の配分戦略が中国古代の「公論公議」と「禪讓」という制度にまで遡る。「選賢」という意味が現在の制度を無意味な実践によって破壊されないように保証している。これと法治を重視する西洋とはきわめて対照的である。すべての文明社会は異なる利益集団に分かれている。政治が実践される場合、各種の利益集団と直面しなければならない。協和という概念は激しく競争している利益集団を調和する有効な策略である。

本章では、天下無外の有用性を高く評価したうえで、天下治乱の状況を批判する。天人関係の存在こそ、天を「苑」し、その目的は人間が主体で行動することである。ここに、天人関係というテーマを主張し、道德の視点からみれば天と人が同じであり、情けがあることを考察する。そして本章では天論から人為への「治乱」弁証法という方法論を導入する。

先行研究においてまず、西洋政治哲学の近代化を二つの道筋があると考えられる。一つは、ホブズである。彼は人間の安全に対する欲望に基づき、神を排除して人間社会の秩序を形成し、ここに近代西洋政治が始まる。今一つは、マルクスである。彼は政治経済の配分権から、政治を論じ、所謂、経済基盤と上部構造を主張するマルクス主義を主張した。本章では中国伝統の政治概念である「治乱」を弁証法で考察し、所謂、道家弁証法、兵家弁証法、儒家弁証法の由来とその特徴を明記した上に、西洋政治哲学中でのヘーゲルの唯心弁証法からエンゲルスの自然弁証法、更にマルクス主義の唯物弁証法の由来とその特徴を比較考察し、東洋と西洋の弁証法を俯瞰したうえで、「治乱」が儒家弁証法に基づく、また「天下」という世界観と相和する弁証法であることを分析する。

第4章で、「天下」と「治乱」を結び付ける「形勢」について論ずる。

「天下」と「治乱」、「形勢」は無関係ではなく、密接な関係を結び、「天下」は「治乱」の対象となり、「治乱」は「天下」に対する正しい操作の方法である。そして「形勢」とは、起点と終点が決まった場合に、その中間部分にあたる。西洋哲学の中で、カントから主観と客観を理論化してから、世界観は哲学の「主観」、すなわち自然と世界がどの様相であろう。方法論が哲学の「客観」、人間がその自然と世界をどのように操作すれば良さそう。世界観が世界を全体的にマクロで見え、方法論が世界をマイクロで改造できさせる。

しかし、その両者を結んで中間的な目がないで、所謂、中国語に「中観」のようなミドル哲学がないだろうか。

主観と客観の両者を結び付きについては次の章「形勢」で分析する。すなわち「天下」というテーマが元々に三位一体の中国政治学であり、「じゃん・けん・パー」において、他の二者を分らないと、このパラダイムを完全に理解できない。西洋が民主、自由、博愛というキーワードが別々に、繋ぎ薄く、複雑関係を持つ吟味性がある西洋政治学のパラダイムがマルクスの「上部構造—経済基盤」の一本しかなく、且つ、「科」学の見れば、それは純粋な政治学より、政治と経済を連携する構造である。本論の「天下、治乱、形勢」で、中国流であるが、純粋な政治学であり、且つ、東洋学問体系の視点で見ると、三位一体、相互支持、丈夫実用な規則な政治学パラダイムを創り出した。(研究アプローチは図3で示す)。

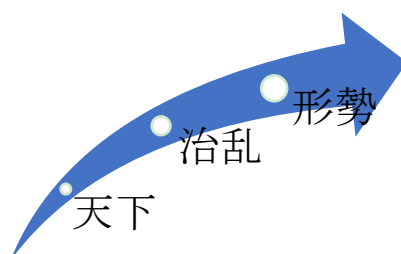


図3

三位一体展開図（西洋ロジック推論証明図、即ち、本文の研究アプローチ）

第5章では、天下無外こそ、天下形勢を判明すべきであることを主張する。

他の国家と民族の知恵を排除しないために、いままで、代表な「世界政治解決案」を巡り、その理論とそれに応じた実践および可能な結果についての論述を以下に記す。

まず、リヴァイアサンが仮定した自然状態が中国学派の「霸道」に類似している。しかし、西洋の政治史を見れば、民主主義がその自然状態を可決できるかどうか、深刻な懐疑を持つ。民主が凄まじい競争を防ぐことができず、それを倍にして、民主に勝つためにいくらの手段使おう、議員競争に対する真実な場である。民主がギリシャからでも弁論家の民主であり、ただ野心家のゲームでしかない。民主に安全を含める諸要求を満足できない。言い返せば、民主がもともと天下万民ためのものでない、民がただ野心家の政治道具、いったん当選すれば、再び注目しなくても良い。一步を避けても、民主主義が有効と主張しても、その他の多様性と実用性を備える巧みな政治方法を無視しているだろうか。

それに対し、カントの「世界共和国」は理想に過ぎる。カントが定めた定言命法が政治家の倫理性にはるかに高い要求を出しており、従いにくい。この問題を解決するためにロールズの『正義論』が「無知のヴェール」を前提に、「自然状態」に代わる案を出した。他文明が「無知のヴェール」を前提とせず、その文明の問題設定と答えれば、どのように面していくべきだろうか。もし、うまく対置しない場合に、「文明の衝突」になり、この残忍さを防ぐために、リベラリズム学派の代表人物ハーバーマスが世界対話を強調し、

協議主義の方法論で、言わば、ハーバーマスが科学者の検討精神を受け、カント流の形而上学した倫理学を検討する方法論を継続し、ただし、ハーバーマスがカントの抽象世界を避け、社会政治の中に運用し、知識人のマイクロ比較法と理解してもよい。このよう方法が、民主主義のような「烏合の衆」の多数決を避け、通常の民主主義と違い、「協議主義」と呼ばれている。

しかし、この種の「協議主義」がやはり政治の権威性問題を解決できず、政治領域より社会領域の方がもっと相応しい。言わば、その協議プログラムがどのように行うか。誰がそのプログラムを組織するか。さらに、そのプログラムの組織者の権威を懐疑する場合に、どうすればよいだろうか。その協議が達成しても、強制力があるがどうか。強制力がある場合に、その暴力措置がだれの命令を聞くか。

これらの難問が永遠に解決できないと考えられ、言わば、ホッブズの暴力論あるいは、荀子の覇王道への理解が必要である。ただし、その暴力さで全部の問題を解決することもあり得ないわけである。

それで、やはり限定される暴力と伴い、逐鹿中原すれば良いだろうか。そのモデルは趙汀陽が「渦なき」で解釈している。ここに、極端な例としてミャンマーと中国の边境に、両国のパートナーシップを象徴する翡翠線があるが、区切られている現状を変えることができないだろうか。また、この現状が国際の間に長期的に存在しており、いわば、現代国際関係は実は主権国家クラブである。

この種の主権国家が外部の他者を敵対し、自分を押し込んで、搾取する。帝国主義に基こそ、世界に不安をばら撒く。帝国主義の基が無辺境な帝国より、主権国家に沿うシンプルなアプローチである。このアプローチの改定を期待することがほぼ不可能である。なぜならば、主権は基本的な概念設定であり、主権以内に、個人ならば自由と社会ならば民主を基本理念にもなる。しかし、個人自由に最大限にすれば、公的事務を己むえない民主に任せ、民主が多数決で決めこそ、その独裁性を同時にも成り立つ。且つ、この独裁性質がただ己むえない選択肢であり、良い治理にならない。

終章で、「民」が本体論としての政治学を主張し、西洋の「人」と「人」の社会政治と比べる、「王」と「民」の上下関係こそ、政治学である。西洋の「人」と「人」の平等関係で、最後に必ず「社会」になる。

品肉できるところが、「車」の部品で組み合わせば、ついに「車」になり、「船」ではない。この意味に言うと、西洋にまだ専門な「政治学」がない。「車」が西洋産業社会の代表で、それに対し、「船」が中国政治学のメタファーであり、「民」は水であれば、「載舟」と「覆舟」の問題を重視すべきである。

要するに本論では陸象山の「六経注我」という複合なアプローチ、天下、治乱、形勢という概念を分析道具として用いており、政治の本質は、陸九淵が主張した「充塞宇宙」けれども、「無非此理」だけであり、したがって本論の基本命題は政治の目的は民主、自由、博愛の主張より天下、治乱、形勢の実践にある。政治学の目標は西洋政治学ではなく、も

はや東洋政治学への追究にこそある。